



Title	『体育報』(1980)にみる「友好第一, 競技第二」思想に関する研究: 中国文化大革命期の体育思想の持続と変容をめぐって
Author(s)	李, 晋寧
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 142, 15-35
Issue Date	2023-06-26
DOI	10.14943/b.edu.142.15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90059
Type	bulletin (article)
File Information	05-1882-1669-142.pdf



[Instructions for use](#)

『体育報』(1980)にみる「友好第一、 競技第二」思想に関する研究

—中国文化大革命期の体育思想の持続と変容をめぐって—

李 晋 寧*

【要旨】 中国の文化大革命期(1966-1976)にスポーツの発展は停滞した。しかし、「友好第一、競技第二」の思想は国内における階級闘争の最中においても、スポーツの普及と外交関係の改善に一定の役割を果たした。果たして、こうした思想はいつまで維持されたのか、効果的に持続できたのか。本稿は1980年代の新聞、『体育報』に着眼し、「友好第一」に対する考え方の変容についてまとめる。1980年以降、人々は「友好第一」思想の影響を維持しつつも、その理念に対して疑義も呈するようになる。つまり、「友好第一」を重視するあまり、手加減、八百長試合が生じたことで、観衆らが試合内容に興味を失い、真剣に対戦する競技スポーツ形成を損なうという考えを、かつてよりも公に表現するようになった。「友好第一」思想は中国人民の体育的価値観を解体し、社会主義的体育思想のもとで統合をはかると同時に、80年代以降の体育的価値の再建過程に影響を与えたと結論づけられる。

【キーワード】 文化大革命期、スポーツ史、中国政治思想、「友好第一、競技第二」

I. はじめに

研究の動機・目的

本研究は文化大革命期(1966-1976)に広く普及した社会主義体育思想、「友好第一、競技第二」の持続性と変容の問題について『体育報』(1980)から明らかにすることを目的とする。

中華人民共和国(以下では「中国」と略す)の文化大革命期に体育・スポーツの発展が停滞したことはこれまで多くの先行研究によって指摘されてきた^{[1][2][3]}。この停滞は国内外の混乱状況がもたらしたものであり、政治闘争の結果であった。さらに、政治闘争の余波は中国全土の人々の生活、娯楽様式に影響を及ぼした。国内における階級矛盾、階級闘争と無産階級政治運動に伴って、中国のスポーツ機関と管理組織は解体され、体育組織と管理システムの解散も招いた。多くのスポーツファンやスポーツ選手は文化大革命の初期にスポーツ活動の停止に追い込まれた^[4]。しかも、都市のスポーツファンを含む若者も無産階級革命に相応しい教育を受けるために農村に送られ、以前のようにスポーツ活動を行う機会が失われた^[5]。

上述の状況において、「友好第一、競技第二」という社会主義体育思想は中国におけるこの時期の停滞したスポーツ活動の救済につながった。よく知られているように、「友好第一」思想を核とした卓球外交^[6]は、対外的な軋轢を緩和し、中華人民共和国との外交に新たな活路を切り開いた^[7]。とりわけ、日米の外交関係の回復により、中国共産党の指導者は国際関係

における体育の重要な役割を認識した。しかも「友好第一」の思想を通して中国特有のスポーツイデオロギーを確立することは資本主義社会のスポーツイデオロギーを否定し、社会主義制度の優位性の強調に役立つだけでなく、スポーツという非政治的活動を通して、社会主義体育思想を受け入れる国家間の同盟を促した。このような試みは中国のスポーツ選手たちが国際大会で活躍する際に資本主義諸国の国際試合とは異なる勝敗にこだわらない独特の競技スタイルを生みつつ、社会主義陣営の国家間の友好関係を強化し、国際スポーツ組織における中華人民共和国の合法的地位を取り戻すことにつながった^[8]。

以上のことを勘案すれば、「友好第一、競技第二」というスポーツイデオロギーは、先行研究が指摘してきた通り、文化大革命により崩壊した体育システムの再建に貢献し、中国共産党の綱領のもとで体育活動を行うことの容認につながり、対外的な不和の緩和という外交面において機能したのは事実であった。しかし、スポーツ選手とスポーツファンにとって、「友好第一、競技第二」思想は体育・スポーツ活動にどのような影響を持続したのか、かつ、その変化の過程をこれまでの研究が明確にしてきたわけではない。さらに、国際試合が増した1980年時代の新聞、『体育報』（1980）を通して論じることは、「文化大革命期」という特殊な時期において中国全土で展開された大規模な政治運動が庶民生活に与えた影響のその後の持続力をメディア文化の萌芽を形成しつつあった1980年代の新聞からあぶり出すことに等しく、外交政策といった共産党の政治戦略からではみえづらい、中国人民の日常生活の観点からの分析に繋がる。なお、そのための分析方法は以下に示す通りである。

研究の方法

第一に、『体育報』を分析する上で必要となる「友好第一、競技第二」思想に関する先行研究の指摘を検証する。具体的には「友好第一、競技第二」思想の発展と意義について整理する（Ⅱ. 「友好第一、競技第二」の思想の発展と意義）。

第二に目的で示した通り、人民の生活意識に基づいた視点を提示するには1958年初刊の新聞、『体育報』^[9]における1980年の議論を扱うことが適切であるとして、資料の内容分析を行い、「友好第一」に対する疑問とその議論についてまとめる（Ⅲ. 『体育報』（1980）にみる「友好第一」に対する疑念と議論）。

なお、文化大革命期とその後に刊行された共産党史資料、中国における主要なスポーツ新聞に相当する『体育報』（1980）を用いる理由は以下の通りである。1978年改革開放政策が公表された後、文化大革命期の言論統制の情勢からの変革に伴い、自由、民主理念が再び中国人民に影響を与えた。また、1980年代のオリンピック大会ではLuとFanによって、中国におけるメダル熱の時代が到来したと指摘されている^[10]。そうした背景のもとで、『体育報』は共産党による官報であったにもかかわらず、共産党政府で定めた「友好第一、競技第二」思想について議論する紙面がみられるなど、文化大革命期と比べると人民による柔軟な意見提示の場が散見される。当時の『体育報』（図1. 『体育報』）は1978年改革開放政策^[11]後に、政府関係者、体育関係者、スポーツファンを含む各階層にある一般の人々の投稿から成ることが末尾の投稿者紙面欄に職業名付きで取って掲載されるようになった^[12]。とはいえ、許可を得ないものが自由に投稿できるまで緩和されているわけではない。しかしながら、『体育報』（1980）にはこれまでなされてきた外交戦略の観点による研究では見えづらい「友好第一、競技第二」思想の人民への影響力を査定する上で、「友好第一、競技第二」の精神に関する議論が展開さ

れており、有効な資料となるように思われる。



図1.『体育報』(1978年12月27日付)

『体育報』(1980)の概要

以下に『体育報』(1980)についてより詳細に述べておきたい。1980年代の『体育報』は国内外のオリンピック運動の発展、中国選手が参加した国際試合および国内スポーツ大会の結果、国内外のスポーツスター、優秀なコーチ、新記録について報道するようになる。『体育報』は文化大革命初期の体育活動の中止に伴い、1966年11月から停刊になったが、1974年に復刊して以後、週2回の週刊新聞となり、蔡莉らによれば、1988年には一回の発行数は80万部を超え、最も多い時には100万部に達成したことがあったという^[13]。しかも、全国紙としてのスポーツ新聞は他に例がなく、『体育報』は1980年代を代表する唯一無二の中国のスポーツ新聞であったと言える。さらに、先に述べた通り、1978年改革開放政策後に政府関係者による投稿から体育関係者、スポーツファンを含む各階層にある一般の人々の投稿から成ることが末尾の投稿者紙面欄に職業名付きで掲載されるようになってきている。

特に1980年の『体育報』では「友好第一、競技第二」に関する議論が掲載された。よって、本稿はこの号に注目する。但し、その特徴を議論するには、これまでなされてきた「友好第一、競技第二」に関する学術的な議論の整理を行い、『体育報』の内容が意味する特異性を浮き彫りにしておきたい。

II. 「友好第一」思想の発展と意義

これまでなされてきた「友好第一、競技第二」に関する概要と議論は以下のように集約できる。まず、文化大革命期の前半の1966年から1971年まで、各省、市レベルのスポーツ専門チームの試合とトレーニングは停止された^[14]。更に、数多くスポーツチームが直接に解散され、選手たちは「反革命分子」、「ソ連修正主義者」^[15]とされ、農村部や「五七幹校」^[16]に派遣さ

れ、労働改造の対象となった。サッカー競技の場合、全国では省市レベルの56のサッカーチームが解散され、サッカー専門の監督115人と選手1124名がサッカーから離反を余儀なくされた^[17]。卓球の場合、優秀な選手は逮捕され、残酷な審問に耐えかねて、自殺した者もいたという^[18]。専門的なスポーツトレーニングと試合から遠く離れた選手たちの競技水準は低下する一方であった。

しかし、1971年に名古屋で開催された卓球ワールドカップ大会では中国ナショナルチームの選手は毛沢東から試合中に「友好第一、競技第二」の精神を貫くよう指令を受け、選手同士の友好関係がメディアで大きく報道されたことを機に中国政府とアメリカ政府は共にそれまで緊迫していた外交関係の緩和のための突破口を見出した^[19]。これはいわゆる「ピンポン外交」と後に呼ばれた^[20]。「友好第一、競技第二」は中国特有の社会主義体育思想として知られることになる^[21]。

再開されたスポーツ活動は「友好第一、競技第二」の原則に沿って、次のようなものとして表現された。競技スポーツにあった激しいボディークontaktと反則行為は許されない。相手チームとの友好関係を重視し、試合中に手加減し、故意に相手に点を取らせ、わざと負けることも奨励された。観戦する人たちも試合の解説者、コメンテーターも中立的な立場を取らなければならなかった。観衆は特定のチームに応援してはならず、両側のチームを応援し、拍手を送ることが要求された^[22]。

さらに、1970年代から80年代、サッカー中国ナショナルチーム選手であった容志行（Rong Zhixing）はサッカーの技術レベルだけではなく、「体育道德」を守りぬいた人と評価され、「容志行（Rong Zhixing）：「体育道德を守り抜いた人」（足壇時光機「中国ペレ」と呼ばれる容志行選手は一体どんなレベルなのか」騰訊網新聞、2020年4月11日掲載）として顔写真付きで掲載された^[23]。試合中に相手選手が怪我した際に、相手の怪我の具合を直ちに確認するため、シュートチャンスをあきらめ、サイドラインにボールを蹴り出したこともある^[24]。わざとファウルしない、相手のファウルで怒らない、審判のミスにも怒らない行動、品格（志行風格）^[25]は文化大革命期とその直後に「友好第一」精神の象徴だと評価された。

また、中国の「友好」を中心にしたスポーツ活動の再開は、資本主義国のスポーツ思想である「勝利至上主義（中国語：锦标主义）」^[26]の軽蔑を促進させ、無産階級革命の正当性、社会主義を堅持し、資産階級と資本主義への反論を可能にした。文化大革命後期にスポーツ場面で強調された言葉は「階級闘争は綱領である（以阶级斗争为纲）」、「無産階級は政治的に高い地位にある（无产阶级政治挂帅）」、「体育は無産階級（工人、農民）のためのものである（体育是工农的体育）」^[27]であった。こうして共産党政府は、サッカーといったスポーツ活動を通じて、人々に「政治的に正しい」社会主義の体育価値観と団体主義の観念及び階級闘争を堅持する革命思想を学ばせ、資本主義スポーツの価値観と対立する社会主義の「友好第一、競技第二」の良さを強調することで、中国人民に対し自らの共産主義制度と思想への忠誠心を育成した。更に、スポーツ活動を通じて、無産階級の体力を強化し、スポーツ運動を奨励する目的は将来の階級闘争に向けた備えであるとされた。

曹守和（Cao Shouhe）の「功績論」

上記に関連し、「友好第一」思想は文化大革命期後半にスポーツ活動の再開に理論的基礎を構築し、中国は国際的なスポーツ大国まで発展することを促進したとする曹守和（Cao

Shouhe)の「功績論」^[28]はよく知られている。そして、「友好第一」思想は中国の国際政治情勢を切り開き、アジアおよび国際的なスポーツ協会における中国の合法的地位の回復に貢献したと指摘された。その際、「競技第二」は「競技が重要ではない」と同じ意味ではないと指摘されている。競技よりも友好と団結はより重要であることを強調したのが「友好第一」思想の真の主旨であると論じられている^[29]。こうして、スポーツの発展は国の政治に従い、貢献しなければならないという考えが醸成された。加えて、スポーツ研究者にとって意義がある仕事とは、どのようにしてスポーツが政治機能を最大に発揮させることができるのかを探索することであるとされた^[30]。

盧元鎮 (Lu Yuanzhen) の「友好第一」思想批判

しかし、2000年以降になると、研究者の中には「友好第一」思想の功績論に反対する立場も公然と示されるようになった。文化大革命時代に、「友好第一」を堅持してスポーツ外交の任務を全うするために、スポーツ競技水準が相対的に低かったチームと試合する際、中国の各チームはよくわざと相手のチームに得点させた^[31]。このような八百長試合は卓球だけではなく、サッカー界でも横行していた^[32]。多くのナショナルチームレベルのサッカー選手が八百長試合に慣れていたので、1974年にイランで開催されたアジア大会のサッカー試合で、中国ナショナルチームの選手たちは技術的にも心理的にも高度な競技大会に適応できなくなっていた。結局予選で敗退した^[33]。この点について、盧元鎮 (Lu Yuanzhen) は八百長試合の観点から「友好第一」思想を批判した。盧はスポーツの精神に則り、スポーツ選手は自らの力で戦い、勝つために全力を尽くさなければならない、故意に負けることは、相手を弱者と考えることであり、敵チームの尊厳を侮辱することであると述べている^[34]。ただし、陳冠任による「「友好第一、競技第二」のスローガンの由来について」では、「友好第一」の言葉の起源は毛沢東の指導の下での「八百長試合」と関連していると述べた^[35]。毛沢東が最初に指導したスポーツ試合の中で、友好関係を一番大事にすることは、弱者への同情、相手を慰めるために全力でプレイしないことを意味していたからである。これに対し、Hongはスポーツの中の友好はスポーツにおける自己表現、自己顕示、個人主義の特質を抑圧するものであったと指摘している^[36]。

以上の議論がこれまでの友好第一、競技第二に関する中国国内における評価であった。なお、曹は「友好第一」が果たした積極的な外交戦略の意味を強調する「功績論」において、『体育報』の存在に触れはしたが、1980年の『体育報』には「友好第一」の妥当性と必要性に対する賛否両論が掲載されているにもかかわらず、この号の内容分析を行っているわけではない。

よって、次節では、『体育報』(1980)における「友好第一、競技第二」に関する議論の詳細について論じる。

Ⅲ. 『体育報』(1980)にみる「友好第一」に対する疑念と議論

前節で論じたように、「友好第一」思想は中国の歴史研究者の間で評価と批判の双方の対象とされてきた。しかし、これまでの「友好第一」に関する研究では、スポーツ文化の受容者である中国人民とスポーツファンへの影響については議論されてこなかった。つまり、これまでの研究は体育政策と外交関係の指摘にとどまり、人民の考えや人民に与えた影響について

はほとんど分析されてきていない。文化大革命期の最中においては、中国人民は政治的忠誠心を示すため、国家政策に対し、自らの意見を述べる勇氣と機会は失われていた。それゆえ、階級闘争の綱領、政治的に敏感な話題を避けていた人民は、文化大革命期に体育領域の「友好第一」思想に疑念を抱きつつも、公的に議論することは許されなかった。ただし、スポーツファンの中には、文化大革命期の「友好第一、競技第二」思想と精神が民衆の間に行われた競技スポーツの実態と適合できないことをひそかに書き残していたケースもあった^[37]。

1980年代になると、「友好第一」思想に対する疑念は『体育報』に記録されるようになる。1978年以後の改革開放政策の影響で、中国人民のライフスタイルも大きく変化し、様々な文化、娯楽が楽しめるようになる^[38]。こうした中、中国における各種目のスポーツチームはより多く、より広い範囲で世界各国のスポーツチームと試合等の交流ができるようになり、中国上海サッカーチームは1980年8月にウルグアイチームと親善試合を行った。

この試合中、ウルグアイチームの選手は激しいボディコンタクトの中で冷静さを失い、上海チームの選手を殴り、レッドカードの判定をうけた。上海チームの殴られた選手も相手からの過激な行動に憤り、殴り返した。試合終了後、『体育報』で議論が始まった。1980年8月20日の『体育報』（図3.「やられたらやり返しても良いか、みんなで議論」『体育報』1980年8月20日付）には、「やられたらやり返しても良いか、みんなで議論」するためのキャンペーンが促された^[39]。新聞の編集者はサッカー試合での事件を機に「友好第一」の精神は必要か否か、またスポーツ試合を観戦する観衆は何を支持し、何に反対すべきについて、スポーツファンの意見を収集するキャンペーンを展開した。その結果、中国各地、各階層の人々が『体育報』の新聞編集委員会に積極的に投稿し、議論に参加した。



図3.「やられたらやり返しても良いか、みんなで議論」『体育報』（1980年8月20日付）

新聞紙上での議論は記事数にして32件に及び、一ヶ月間ほど続き、中国スポーツ史上に「友好第一」思想に対する初の公の議論であったと考えられる。これは文化大革命期の思想が普及するプロセスと異なり、人民の側からの「友好第一」思想に対する新聞という公の場での意見表明であったと言える。この議論には賛否両論が伴った。以下の表は1980年8月20日から9月22日までの議論を「賛成派」と「反対派」に分類してまとめたものである。

まず、「友好第一」と「やり返してはいけない」に賛同する人々の主張を表1の通り、3つの観点に分類した。

<賛同派>

表1「友好第一」と「やり返してはいけない」に賛同する人々の主張

賛成する理由	記事の内容
1.スポーツは友好を促進すべきものである	<p>戴「このような類推は良くない」^[40]： サッカーのようなスポーツ競技では激しいボディーコンタクトがあるとしても、戦争と同じではない。戦争は我が国の人民の命と利益を守るためのものである。外国チームとのサッカー試合は友好を促進するためのものである。もし、試合中にボディーコンタクトが激しくなると、殴り合いの状況になって、スポーツ試合も成立しなくなるのではないか。…</p> <p>劉「文明化された事業には文明に相応しい風格が必要」^[41]： 容志行選手の例を挙げたい。スポーツ試合は人類の文明の象徴である。体育は文明化された事業であるからこそ、「友好第一」を擁護すべきである。殴られた際に、すぐに殴り返したら、「友」がいなくなる。…</p>
2.スポーツの目的は外交である	<p>汪「中国選手の風格について」^[42]： やられたらやり返すに従えば、友好関係の促進につながるだけでなく、我が国の威信を高めることもできない。スポーツ競技の選手は外交官のような存在であり、情宣者（友好第一の理念を宣伝する人）でもある。…</p> <p>黄「試合中と試合後ともに友好を大事にするべき」^[43]： 相手に悪意のある違反行為をされても、友好に対応するべきである。そうした行為こそ、我が国の威信を高めることができる。…</p>
3.スポーツ競技中の暴力事件は民族伝統の精神と美徳に反するものである／不道徳かつ野蛮な行為は許されない	<p>王「自分自身に厳しく、他人に寛容であるべき」^[44]： 「友好第一」はすでに人民に受容されている。外国人は「客人」であるので、客人を殴るのは中国の伝統的な美徳に反する。絶対にやってはいけない。…</p> <p>張（広東省体育委員会）「優秀なスポーツ選手は優れた修養があるべき」^[45]： ペレ選手^[46]と容志行選手の例を挙げたい（野蛮なファール行為をされても怒ることなく、プレイに集中）。試合に集中するために、野蛮なプレイをするべきではない…</p>

	<p>侯「もう一つの試合を思い出した」^[47]： 韓国（南朝鮮）とのバスケットボールの決勝戦に言及したい。中国チームがリードすると、韓国（南朝鮮）の選手たちはすぐに悪意にまみれたファール行為を行った。それに対し、中国選手たちはやり返さず、正々堂々と得点することで勝利した。これこそが推奨されるべき試合であり、殴り返した上海チームの選手の行為は褒められたものではない。…</p> <p>馬「体育道徳を重視するべき」^[48]： 勝敗は一時的なものであるが、友好は永続的なものである。野蛮なファール行為がなされたとしても、体育道徳を失ってはいけぬ。ペレと容志行の例が良い例である。…</p> <p>邵「道徳の壁を築き上げよう」^[49]： 選手は社会の体育教師に相当する。不道徳的な行為は社会に悪い影響を与える。青少年の成長のために、スポーツ競技での不道徳的な行為は禁止されるべきである。…</p> <p>小「食堂従業者の感想」^[50]： 私自身が食堂でお客さんに誤解されて殴られたことがあったが、その時にやり返すことなく、冷静な会話で対応し、誤解を解いた経験があった。日常生活の中でもスポーツでも「礼」を守るべきだと主張したい。…</p>
その他：日常道徳と同義	<p>梁「やり返すのは良くない」^[51]： 私の勤務先でアンケート調査を行った。対象57人のうち、「やり返した方が良い」と思ったのは4人しかいない。…</p> <p>双「なかなか同意できない」^[52]： 工場でのスローガン「安全第一」は生産を諦めることを意味していない。「友好第一」も同じように、「友好」を大事にすることは、「競技」レベルを放棄することと同じ意味ではない。スポーツ競技水準を高めることと「友好」を重んじることは矛盾しない。…</p>

以上の「表1「友好第一」と「やり返してはいけぬ」に賛同する人々の主張」はウルグアイと上海とのチームの間で生じた乱闘に関して、言論統制が和らいだ文化大革命期以後の1980年においても、「1. スポーツは友好を促進すべきものである」、「2. スポーツの目的は外交である」、「3. スポーツ競技での喧嘩は民族伝統の精神と美徳に反するものであり、不道徳で野蛮な行為は許されない」、その他、日常道徳の観点から「友好第一」思想を支持し、「やり返すは良くない」と思った人がなおも多く存在していたことを示している。以下では上記の観点についてより詳細に述べていきたい。

1. スポーツは友好を促進すべきものである

まず、表1に示されているように、「サッカー試合は友好を促進するためのものである」、ま

た「殴り返したら、「友」がいなくなる」といった表現から、外国チームとのサッカー試合は友好を促進するためのものであると主張しているケースがなおも存在していることがわかる。このことから、文化大革命の時期を過ぎて、その直後の時期においては、なおもスポーツの機能は友好関係の促進にあると多くの人々が信じていたことがわかる。文化大革命を経験した多くの中国人にとって、「友好第一」の理念は文化大革命中に多くの人々の心に深く浸透し、体育的価値観の中心を形成し、スポーツ実践と乖離できないものとなっていたと言えよう。それ故、多くの中国人民にとって、上海チームの選手と外国チームの選手の間で生じた殴り合いについて、「やり返す」という行動は、非友好的なものであり、理想的なスポーツ活動の理念に反し、強く批判されるべきと主張されている。「殴り合いの状況になって、スポーツ試合も成立しなくなるのではないか」(表1-1, 註40)といった表現から、文化大革命期に友好促進の役割を果たさないスポーツ活動は、政府や国民によって容認されなかったことの影響は根深いものがあることがわかる。また、表1-1(註41)では、容志行選手に言及しつつ、「体育は文明化された事業であるからこそ、「友好第一」を擁護するべきである、殴られた際に、すぐに殴り返したら、「友」がいなくなる。…」の表現にみるように「友好第一」は「やられたらやり返す」を拒絶し、文明が重んじる伝統的な品性を重視することから、中国において品格の重視を意味する「志行風格」と同義であるとして扱われている。これは毛沢東時代の模範教育「雷鋒同志に学ぼう」運動^[53]に見られた考え方に類似していた。これは、一つの道德的な模範の確立、人民は模範の観察を通して、集団的な人格が形成されるというものであった。このことは「友好第一」は「志行風格」とも融合するスポーツ活動を通じた道德模範として確立し、人民に「友好第一」の精神を普及する上で、伝統的な道德概念との調和を為したことを意味していよう。

2. スポーツの目的は外交である

また、表1-2(註42)には「スポーツ競技の選手は外交官であり、情宣者(友好第一の理念を宣伝する人)でもある」といった記述も見られた。これは、文化大革命期以後も、スポーツを通じて外交機能を期待することを示している。なぜなら、「友好第一」思想の下で、社会主義思想の教育を受け、およそ十年間に確立した体育価値観の「友好第一」を信奉した人々は、スポーツは政治のためのもの、いわゆる外交の手段の一つであったと信じ、試合中に「友好第一」を原則とすれば、国の威信も高められると考えていたからである^[54]。それゆえ、外交を通じた政治的緩和策と社会主義体制の正当化という国家の使命がなおもスポーツの機能であると捉えられていることがわかる。

3. スポーツ中の暴力事件は民族伝統の精神と美德に反するものである／不道德かつ野蛮な行為は許されない

さらに、表1-3(註49)には「選手は社会の体育教師に相当する」という表現も伴った。それらはスポーツ選手の社会的機能を強調していた。スポーツ選手には社会的影響力があり、不合理で不道德な行動をとれば、社会、特に若者の成長に悪影響を及ぼすと主張されていた。また「外国人は「客人」であるので、客人を殴るのは中国の伝統的な美德に反する。絶対にやってはいけない」(表1-3, 註44)といった表現がある。このことから、試合中の「やり返し」は反則行為であり、中華民族の歴史文化と国民精神に適合せず、試合中の「リベンジ」は平和と

調和に反するという考えが示されている。

以上にみられる「賛成派」の主張は外交上の利点といった政治的意味を超え、「友好第一」という体育思想がいかに一般社会に根強く浸透した社会道徳となっているかを示すものである。

しかしながら、以上のような賛同派の見解や「友好第一」の思想に異論を唱え、「やり返して良い」と考えた反対派の主張も存在した。以下ではこうした「反対派」の主張について詳述していく。それらの主張の概要は<表2「友好第一」と「やり返してはいけない」に反対する人々の声>に示す通りである。

<反対派>

表2「友好第一」と「やり返してはいけない」に反対する人々の主張

反対する理由	記事の内容
<p>1.やり返しは「リベンジ」ではなく、「自衛手段」である／試合双方の選手は公平かつ平等に扱われるべき</p>	<p>上海チームのファンは「やり返したのでよくやった」^[55]：私たちは上海チームと外国チームのサッカー試合の観戦者である。相手チームの選手たちは2点連続して取られたために、気持ち焦り、悪意を持って上海チームの選手たちを傷つけ始めた。その上、彼らは上海チームの選手たちに暴力をふるい、殴るなどした。そうした場面を見た私たちは共に激怒していた…上海チームの選手は良くやった、悪意を持っていた外国人選手にやり返したことは賞賛に値する。よくぞ殴り返した。…これは「リベンジ」ではなく、正当防衛に違いない。</p> <p>馬鳳鳴「友好を大事にするためには双方の努力が必要」^[56]：激しい試合の中で、もし双方が友好関係を大切にしたら、どのような問題でも解決できる。人を殴る行為は許せない、これは道徳的な問題であり、友好第一の大前提を喪失している。…相手から挑発された場合、やり返すべき。…</p> <p>丁「上辺だけの友好は要らない」^[57]：相手に妥協することは友好の促進にはつながらない。友好の価値も失わせる。文化大革命期はすでに終わったので、表向きの友好は不要である。政治と体育は関わりはあるが、区別もすべきだ。無理矢理両者を結合するわけにはいかない。上海チームの選手はすでにレッドカードをもらったのだから、それ以上非難される理由はない。</p>
<p>2.「友好第一」は真剣勝負を阻害し、選手たちのパフォーマンスの向上を妨げるものである</p>	<p>衆兵「友好第一、競技第二は不条理だった」^[58]：我が国のサッカーの競技水準は高くない。サッカーはもともとボディコンタクトが多いスポーツであり、乱闘になることも珍しくない。もし、上海チームの選手たちが外国人選手を殴り返したことで、懲罰や処分を受けるなら、誰が再び本気でサッカーを続けられよう？「友好第一」を遵守したがために、負けて、それで榮譽と言えようか？そもそも「友好第一」は不条理である。試合中は敵対関係にあるのだから、敵に対して、「友好第一」と言うな</p>

ど冗談に思える。「友好第一」は我が国のスポーツ競技レベルの向上を妨害する考え方である。

王「良くやった、正しかった」^[59]：

長い間、我が国のスポーツ競技は「友好第一、競技第二」という戒律で縛られてきた。選手たちは国際試合でいつも我慢しなければならない。こういう戒律を二つに分けてほしい。弱いチームや我が国と平等的な関係を守る国に対しては「友好第一」を尊重してもかまわないが、私たちを軽蔑して、尊厳をないがしろにするチームに対しては「闘争第一」で対応すべきと思う。やられたらやり返しても良いが、最初に手を出してはいけない。…しかも、「友好第一」という戒律はスポーツ競技の発展を妨げている。なぜなら、「友好第一」はスポーツ選手としての気概や闘争心を抑制させるからだ。新しい時代には新たな闘争方法で国際試合を行い続けるべき。…

黄「タブーを打破しないとサッカーに希望なし」^[60]：

上海チームの選手が試合中、良いパフォーマンスを見せたのは、「友好第一」かを打破する勇気があったことと切り離せない。懲罰や処分は不公平だ。虚偽の友好に惑わされないでほしい。区別して思考する能力をもってほしい。試合中の激しいプレイは既に「友好」を十分に反映していたので、「友好第一」を持ち出さなくても良い。精神的な呪縛を解き放てば、サッカーの発展に希望が持てる。

呉ら「『友好第一、競技第二』は言い過ぎに注意」^[61]：

「友好第一」は全てのスポーツ競技に相応しくないとと思う。一般的に考えてもサッカー試合の中で、敵も味方も共に力を尽くして相手に勝つことに努力している。もし、単なる「友好」を目標にしたら、誰もが本当の水準を発揮できなくなる。質の良い試合と良いパフォーマンスを維持する目的で「競技第一」というのはよいが、「友好第一」は試合の中の選手たちの心理にも見合わない。「友好第一」は親善試合の場合においてのみ合致する考え方である。…

曲「国内と国際試合を区別すべき」^[62]：

国内の試合では勝敗は重要ではないが、国際試合では異なる。我が国のスポーツ競技水準は低いので、即刻高めべきと思う。それ故、なおも「友好第一」の精神を堅持することは良策ではない。

<p>3. 高揚した愛国心とナショナリズム</p>	<p>上海チームのファン「やり返したのでよくやった」^[63]： …中国人民は長い歴史の中で外国から侮辱され、それに慣れてしまったが、1949年の新中国成立以来、外国人が中国で人を殴るのは珍しいことだろう。…私たちの選手は巧みなテクニックで相手に勝利しただけでなく、侮辱されずに人民の尊厳も守った…上海チームの選手は反撃しただけだった。悪いのは外国人の方である。…もし、これを認めないなら、ベトナムの挑発に対して、領土を守るための反撃^[64]も同じく認められないというのであろうか。</p> <p>王「良くやった、正しかった」^[65]： …選手たちは国と人民の尊厳のために外国人と戦っていたので、実に無罪である。…新しい時代には新たな闘争方法で国際試合を続けるべきである。</p> <p>馬鳳鳴「友好を大事にするためには双方の努力が必要」^[66]： …中国の選手は絶対に相手を先に殴ってはいけない。しかし、相手から挑発された場合、やり返すべきだと思う。世界中の各民族は公平かつ平等であり、相手を軽蔑してはいけない。これは尊厳を守る正当な行為である。</p>
---------------------------	--

以上、「表2「友好第一」と「やり返してはいけない」に反対する人々の主張」に示した通り、反対派は次のような3つの観点から「友好第一」に反対し、「やり返して良い」と考えた。すなわち、「1. やり返しは「リベンジ」ではなく、「自衛手段」である／試合双方の選手は公平かつ平等に扱われるべき」、「2. 「友好第一」は真剣勝負を阻害し、選手たちのパフォーマンスの向上を妨げるものである」、「3. 高揚した愛国心とナショナリズム」の3点である。以下ではその詳細について論じていきたい。

1. やり返しは「リベンジ」ではなく、「自衛手段」である／試合双方の選手は公平かつ平等に扱われるべき

まず、1.の観点は、「文化大革命期はすでに終わったので、表向きの友好は不要である」、「政治と体育は関わりはあるが区別もすべきだ」、「無理矢理両者を結合するわけにはいかない」、「上海チームの選手はすでにレッドカードをもらったのだから、それ以上非難される理由はない」（表2-1.註55に同じ）といった表現にみられるように、文化大革命期の体育価値観とした「友好第一」思想に支配されたスポーツ試合の実態に疑義が生じたことが露呈されている。しかも、このサッカー試合において、上海チームの選手からの友好だけを要求し、相手チームの選手の悪意を無視する行為は不平等的だと考えられた。試合双方の選手にあった不平等は、スポーツ試合の公平性を損ない、観衆とスポーツファンに嫌悪感を与えた。さらに、文化大革命期に行われた人民による自発的なスポーツ試合の中においてすら、「友好第一」の思想は、競技スポーツの参加者たちが娯楽性と遊戯性を楽しんでいた実態と結合しにくいものがあつたと指摘している研究と整合性がある^[67]。そうした研究と合わせ読めば、『体育報』の議論で反映された「友好第一」思想への嫌悪感は1980年代に突如現れたものではなく、文化

大革命期においてもスポーツ活動の実態と結合できなかった「友好第一」思想への違和感が表面化し、そのことが初めて公の場で議論されることにつながったことを示している。

2. 「友好第一」は真剣勝負を阻害し、選手たちのパフォーマンスの向上を妨げるものである

表中の2に示した通り、「友好第一」という戒律はスポーツ競技の発展を妨げている。なぜなら、「友好第一」はスポーツ選手としての気概や闘争心を抑制させるからだ。(表2-2, 註59)、「敵に対して、「友好第一」と言うなど冗談に思える。」(表2-2, 註58)、また「単なる「友好」を目標にしたなら、誰もが本当の水準を発揮できなくなる」(表2-2, 註61)といった表現にみられるように、「友好第一」思想は選手のパフォーマンスの向上を妨げると主張されている。文化大革命期には、一部のスポーツ選手たちは八百長試合に慣れていたので、その後再開された大会試合で、技術的にも心理的にも高度な競技大会での試合に適応できなくなり、早い段階で敗退してしまっていたことがあった。有名なサッカー試合のコメンテーター、張路^[68]は文化大革命期の1969年に「上山下郷」運動でサッカーの訓練を諦めなければならなかったという。彼は「もし文化大革命期がなければ、自分はずっとサッカーの道を遠くまで歩めただろう」と語ったことがあった。このことに際し、解^[69]と王^[70]は中華民族の伝統美徳である「中和」、「不爭」は中国におけるサッカーのような競技スポーツの文化的発展を妨げるものと指摘している。以上のことは1980年代になると、文化大革命期の「友好第一」思想はサッカーのような競技スポーツの発展を妨害し、「友好第一」は不要だと感じるようになった人々が出現するようになったことを『体育報』を通して確認できたことを示している。

3. 高揚した愛国心とナショナリズム

また、表中の3で示したように、「中国歴史の中で外国に侮辱された過去があったので、今は外国選手からの挑発は許されない」、「選手たちは国と人民の尊厳のために外国人と戦っているから実に無罪である」(表2-3, 註63, 65)といった試合を戦争に例える表現は、中国人民のナショナリズムと愛国心を反映している。LuとFanが主張したように^[71]、中国におけるスポーツの発展に伴って反映されたナショナリズムは1840年以降、中国は半植民地状態となり、欧米列強の侵略をうけたことを想起させる。政府は様々な不平等条約に同意せざるを得なくなり、第二次世界大戦の終結まで、中国人民は屈辱的な生活に耐えてきた。1949年に中国共産党政府は中国人民共和国の成立以来、外国に支配されない強国を建設し、屈辱的な歴史を二度と繰り返したくないという思いが人々の間に浸透していた。よく知られているように、1950年代の朝鮮戦争とその後の「大躍進運動」^[72]を通じて、中国人民は当時代の強国（アメリカ、イギリスなど）との国力の格差を認識し、その差をなくす「超英赶米（中国語：超英赶美）」を目標にしたスローガンが現れた。その後の文化大革命期に、アメリカに向けての「反帝国主義」と旧ソ連に向けての「反修義主義」が中国全土で提唱された。外部の軍事的な脅威に備えるだけでなく、外国の文化、ライフスタイル、娯楽方式などの全てを批判したのが文化大革命であった^[73]。こうした外国との対立を通して、中国人民の愛国心とナショナリズムは高揚した。それゆえ、1980年代以後の中国においても、競技スポーツは国に栄光をもたらす、非政治的な戦いを通じて国家の威信を高める媒体であるとなおも認識され続けていることとも関わっている^[74]。また、反対派の議論においても、サッカーのルールや試合進行に関する観点のみならず、政治機能、風格、精神性、歴史文化といったサッカー以外のもの

のを通して議論されていることも特徴的であった。

IV. 結 論

本稿は1.<「友好第一」の発展と意義>, 2.<『体育報』(1980)にみる「友好第一」への疑念と議論>の二つの観点から「友好第一」思想の歴史的効用について分析した。これらは以下のように集約できる。

まず、<「友好第一」の発展と意義について>において、「友好第一」思想は文化大革命期に中国における体育価値観として確立し、資本主義諸国の「勝利至上主義」に対抗するイデオロギーとして、将来にあるかもしれない「階級闘争」に備え、無産階級の人々の身体を鍛えるための思想であることについて述べた。特に政治機能を通じて、外交関係の改善に転機をもたらした「友好第一」思想は研究者の間では中国政府と人民に貢献した「功績論」として理解されてきた。しかし、近年の研究の中では「友好第一、競技第二」は手加減や八百長試合は、スポーツの自己表現、自己顕示、個人主義の抑圧であったとの指摘がなされるようになった。筆者も、文化大革命期に書き残された一個人の日記分析を通じて、「友好第一」思想はスポーツ実態と結合できず、スポーツの発展を抑圧した点について別稿にて論じている。

そこで、本研究は1980年代の『体育報』の内容分析を通じて、人民の観点から、この傾向を実証的に明らかにした。<Ⅲ.『体育報』(1980)にみる「友好第一」に対する疑念と議論>で論じたように、1980年の『体育報』に記載された「友好第一」にめぐる議論を分析した結果、文化大革命期の親善試合を観戦することによって、「友好第一」思想の下で、社会主義思想の教育を受け、体育価値観の「友好第一」を信奉した人々は、スポーツは政治のためのもの、いわゆる外交の手段の一つであったと理解し、革命期以後も深く影響されたことが明らかになった。しかし、手加減、八百長試合に嫌悪し、「友好第一」思想は双方が正々堂々と真剣に対戦する競技スポーツの形成を阻害するものであるという考えが1980年代以降に公にされるようになったことも示した。この種の議論の反対派の中には、スポーツの発展の阻害要因であるとして、旧来的な「友好第一」に嫌悪感を示す場合もあったが、サッカーのような競技スポーツを評価する際、ルールや試合進行に関するのではなく、政治機能、風格、精神、風土といったサッカー以外の一般道徳に照らして議論されている面があり、スポーツの遊戯的価値観からスポーツを評価するという議論はなおも不十分であったと言える。

以上のことから、文化大革命期の体育思想「友好第一」はそれ以前に存在した中国人民の体育的価値観を解体し、社会主義的体育思想のもとで統合をはかると同時に、1980年代に至っても、根強い影響を残したが、文化大革命期とは異なり、共産党の官報の性格を帯びる『体育報』の中においてすら、堂々とその伝統的考え方に修正を迫る主張が示されるようになったと言える。しかし、こうした持続的側面と変化の兆しの双方において、いずれにしても、「友好第一、競技第二」は文化大革命に植え付けられた思想をもとに、その賛否が議論されたと言う意味で、体育的価値の再建過程に深く影響を与えた。

すなわち、中国の道徳規範としての「志行風格」といった格言と融合しつつ、長らく植え込まれていた「友好第一、競技第二」は持続力を有し、容易に変容するものではなかったものの、本研究は1980年代以降の新聞『体育報』を扱うことで、文化大革命期から存在していた民衆の違和感が中国の公的なメディアで表明された事実を通して、先行研究が論じてきた外

交政策としての「友好第一、競技第二」分析には見られなかった新たな視角を与えたと言える。それは体育・スポーツが政治思想と結びつくことへの批判であり、遊戯規範としての体育・スポーツ思想の構築に向けた第一歩であったといえよう。

注

- [1] 湖南省体育局「文革は体育の停滞を引き起こした」『中華人民共和国体育史地方巻』, 湖南体育網—体育文史。http://tyj.hunan.gov.cn/tyj/tslm/tyws/200212/t20021231_3464510.html 2002年12月31日公表, 2022年7月12日アクセス。
- [2] 楊鳴亮他「文革体育新思考」『体育文化導刊』, 国家体育总局体育文化發展センター, 2013年第11期, 142-144頁。
- [3] 朱珊, 王冬「文革期間我國の体育變遷狀況簡析」『体育文化導刊』2013年第1期, 国家体育总局体育文化發展センター, 141頁。
- [4] 同上。
- [5] Fan Hong, “‘Not all bad’: Communism, society and sport in the great proletarian cultural revolution: A Revisionist Perspective (すべてが悪かったわけではない! 無産階級文化大革命時代の共産主義, 社会, スポーツ: 修正主義者の視点)”, *The International Journal of the History of Sport*, VOL16 No.3, 1999.9, pp.47-71, p.49.
- [6] 卓球外交: ピンポン外交(乒乓外交)とは1971年に日本の愛知県名古屋市で行われた第31回世界卓球選手権に, 中華人民共和国が6年ぶりに出場し, 大会終了後に中国がアメリカ合衆国など欧米の卓球選手を自国に招待したことを嚆矢とする米中間を中心とした一連の外交をいう。これにより朝鮮戦争での交戦以来敵対してきた米中関係の緊張緩和が実現し, 大きな変化をもたらした。さらに, 日中国交正常化の起爆剤にもなり, 世界の歴史に新しいページを開いた(鄭躍慶「[ピンポン外交]と後藤鉦二」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』2007年2号, 現代社会研究科出版・編集委員会, 35-51頁)。
- [7] 徐君偉ら「中米ピンポン外交の歴史的論理と啓蒙」『南京体育学院学报: 社会科学版』, 2015年第5期, 52-57頁。
- [8] 曹守和「[友好第一, 競技第二]に関する歴史研究」『体育文史』1992年第1期, 国家体育总局体育文化發展センター, 2-6頁。
- [9] 『体育報』は1958年9月中華人民共和国体育運動委員會の指導の下で創刊された体育専門新聞である。社会と人民に向けて国家の体育の發展狀況について報道し, 宣伝するねらいがあった。文化大革命期の1966年11月から停刊したが, 1974年1月から復刊した。1988年『中国体育報』に新聞名を変えた。
- [10] Lu Zhouxiang & Fan Hong, *Sport and Nationalism in China*, in particular, ‘The Dream to Be a Strong Country’: [CHINA’S NEW NATIONALISM AND THE GOLD MEDAL FEVER] Routledge: London and New York, 2014, pp.105-113.
- [11] 改革開放政策: 中華人民共和国の鄧小平の指導体制の下で, 1978年12月に開催された中国共産党第十一期中央委員會第三回全体會議で提出された。その後, 中国における国内体制の改革および対外開放政策のことを指す。また, 社会主義計画經濟政策から社会主義市場經濟政策への変換を主張される。(張樹軍, 「鄧小平と中共十一三中全会」, 人民網, 中国共産党新聞 http://dangshi.people.com.cn/n1/2019/0123/c85037-30586524.html, 2019年1月23日掲載, 2023年3月26日閲覧。)
- [12] 『体育報』編集部は「今回の議論の参加者は体育従事者, スポーツ選手だけではなく, スポーツに関心のある工人, 農民, 軍人, 科学技術関係者, 教育関係者, 文化芸術関係者, 政府関係者もたくさんいる。」と述べた。更に, 『体育報』に刊行された文章には, タイトル下の氏名欄にも投稿者の職業と所属が掲載された。(『体育報』編集委員会編集部「[やり返しても良いか]の議論について読者様へ」『体育報』第1973期, 中華人民共和国体育運動委員會: 北京, 1980年9月22日。)

- [13] 蔡莉, 王晓東「我が国におけるスポーツ新聞市場の発展への分析と思考」『西安体育学院学報』, 2007年第3期, 17-21頁。
- [14] 楊鳴亮他, 前掲論文, 142-144頁。
- [15] 「ソ連修正主義」: フルシチョフは, 旧ソ連共産党の元指導者スターリンとスターリン主義を強く批判したが, 結果的に中国に圧力を与えたと中国共産党に判断された。それゆえ, 中国共産党は旧ソ連のやり方はすでに社会主義路線から乖離し, 新しい帝国主義になったことを批判する意味で, 「修正主義」, また「社会帝国主義」と呼んだ (Lenin, “Revisionism, Social Imperialism”, *The Collected Works of Lenin* (中国語: 列宁全集), People's Publishing House (Beijing), 1959, No.29, p.458)。
- [16] 「五七幹校」: 中国共産党および政府機関の幹部が, 農村に下放し生産労働に参加して政治意識を高め, 官僚主義・教条主義的作風を改めるために開設された農場を指している。
李城外「40年前の特別学校——「五七幹校」」, 鳳凰資諮, https://news.ifeng.com/history/zhiqing/ziliao/200910/1020_6858_1395419.shtml, 2009年10月20日掲載, 2022年8月25日アクセス。
- [17] 国家体委体育文史工作委員会, 中国サッカー協会編「新中国サッカーの発展道路」『中国サッカー運動史』, 武漢出版社, 1993年6月, 135頁。
- [18] Nicholas Griffin, “Death to the Doubters”, *Ping-Pong Diplomacy: the Secret History Behind the Game that Changed the World*, New York: Scribner, 2014, pp.153-158.
- [19] 壁谷卓「世界卓球3連覇の荘則棟氏が東京で講演 伝説の王者、ピンポン外交を語る」, <https://allabout.co.jp/gm/gc/213665/>, 2004年10月18日掲載, 2023年3月26日閲覧。
- [20] Nicholas Griffin, op.cit., pp.234-250.
- [21] Fan Hong & Lu Zhouxiang, “Sport in the Great Proletarian Cultural Revolution (1966-1976)”, *The International Journal of the History of Sport*, VOL 29 No.1, (Jan.2012), pp.53-73.
- [22] Fan Hong, “ ‘Not all bad’ : Communism, society and sport in the great proletarian cultural revolution: A Revisionist Perspective. p.54.
- [23] 図の出典: 足壇時光機「「中国ベレ」と呼ばれる容志行選手は一体どんなレベルなのか」騰訊網新聞, <https://new.qq.com/rain/a/20200411A00MOX00>, 2020年4月11日掲載, 2023年1月10日閲覧。
- [24] 胡榮錦「中国サッカーの「志行風格」について」『同舟共済』, 2020年第5期05, 広東省政協, https://www.gdszx.gov.cn/zxkw/tzgj/2020/05/content/post_21438.html, 2020年6月10日掲載, 2022年5月8日アクセス。
- [25] 同上。
- [26] 朱育「勝利至上主義に絶対反対 (坚决反对锦标主义)」『新体育』, 人民体育出版社, 1973年第十期, 8-9頁。
- [27] 「階級闘争を綱領にする」: 1957年毛沢東によって提唱された。「無産階級と資産階級の矛盾, また社会主義路線と資本主義路線の矛盾は我国にとって今も主要な矛盾だと考えられている」。その後, 文革時代では, 中国共産党の一番大事な綱領として民衆の思想を影響していった (中国共産党新聞: <http://cpc.people.com.cn/GB/64162/64170/4467349.html> 2001年6月8日掲載, 2017年8月10日アクセス; 北京市東城区区委群衆体組「社会主義体育の方向を変えてはならない」『新体育』, 人民体育出版社, 1976年第五期, 5-6頁。
- [28] 曹守和, 前掲論文, 2-6頁。
- [29] 同上。
- [30] 同上。
- [31] Fan Hong, “ ‘Not all bad! Communism, society and sport in the great proletarian cultural revolution: A Revisionist Perspective ”, p.54.
- [32] 范宏基, 文姜猛『王洪礼の語録: サッカー八百長試合は文化大革命時代で既にあった (王洪礼生前经典语录: 假球文革就有)』新浪网:
<http://sports.sina.com.cn/j/2003-11-30/0159678115.shtml>
2003年11月30日掲載, 2017年8月14日アクセス。

- [33] 鳳凰資諮「文革サッカーの記憶断片（文革足球記憶碎片）」
http://sports.ifeng.com/gnzq/200908/0818_4683_1307294.shtml 2009年8月18日掲載, 2017年8月14日アクセス。
- [34] 盧元鎮「友好第一、競技第二を再度提唱すべき（中国語：建议重提友谊第一比赛第二）」『体育文化導刊』国家体育总局体育文化發展センター, 2009年第3期, 5頁。
- [35] 陳冠任「友好第一、競技第二」のスローガンの由来について（中国語：“友谊第一 比赛第二” 口号的由来）」中国中央宣伝部中央文明網, 人民政協報, http://www.wenming.cn/jwmsxf_294/lyjt/201012/t20101202_22963_1.shtml, 1-2頁。2012年12月掲載, 2022年5月17日アクセス。
- [36] Fan Hong, “Not all bad! Communism, society and sport in the great proletarian cultural revolution: A Revisionist Perspective”, p.65.
- [37] 文化大革命期の1975年冬, 工場の労働者たちが自発的に行ったサッカーゲームの実態は「友好第一」精神と結合できないことを『サッカーと漫画』の著者, 劉 齊が記した日記分析を元に拙稿にて示した。彼の日記に基づく著書, 『サッカーと漫画』（安徽文芸出版社, 2015年1月, 55-57頁）には, サッカーファンが政治的効用から離れて, スポーツの遊戯的本質を楽しんでいたことが表現されている（李晋寧「文化大革命期の中国におけるサッカーと政治思想に関する研究『球迷日記（サッカーファンの日記）』を手がかりに」『スポーツ史研究』第33号, 2020年3月, 35頁）。
- [38] 中国社会科学院課題組「改革開放から40年間中国における民生の發展（改革开放40年中国民生发展）」, 人民網, 人民日報, <http://politics.people.com.cn/n1/2018/1220/c1001-30477376.html>, 2018年12月20日掲載, 2023年3月26日閲覧。
- [39] 『体育報』編集委員会編集部「やられたらやり返しても良いか, みんなで議論」, 『体育報』第1959期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年8月20日。
- [40] 戴亜新「このような類推は良くない」『体育報』第1961期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年8月25日。
- [41] 劉永勝「文明化された事業には文明に相応しい風格が必要」『体育報』第1963期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年8月29日。
- [42] 汪広礼「中国選手の風格について」『体育報』第1963期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年8月29日。
- [43] 黄国慶「試合中と試合後も友好を大事にするべき」『体育報』第1967期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月8日。
- [44] 王軍「自分自身に厳しく, 他人に寛容であるべき」『体育報』第1965期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月3日。
- [45] 張均浪「優秀なスポーツ選手は良い修養があるべき」『体育報』第1961期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年8月25日。
- [46] ペレ選手：ペレ（Pelé）, エドソン・アランテス・ド・ナシメント（Edson Arantes do Nascimento, 1940年10月23日—2022年12月29日）は, ブラジルの元サッカー選手である。実績から「サッカーの王様」, あるいは「20世紀最高のサッカー選手」と評され, 多くのサッカー選手, サッカーファンから「サッカー史上最高の選手の一人」と見做されている。
- [47] 候恵雲「もう一つの試合を思い出した」『体育報』第1965期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月3日。
- [48] 馬雲来「体育道徳を重視するべき」『体育報』第1965期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月3日。
- [49] 邵心誠「道徳の壁を築き上げよう」『体育報』第1973期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月22日。
- [50] 小凡「食堂従業者の感想」『体育報』第1973期, 中華人民共和国体育運動委員会：北京, 1980年9月22日。

- [51] 梁智遠「やり返すのは良くない」『体育報』第1973期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月22日。
- [52] 双明「なかなか同意できない」『体育報』第1973期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月22日。
- [53] ‘雷鋒同志に学ぼう’ 運動: 雷鋒 (1940年12月18日 - 1962年8月15日), 中国人民解放軍における模範兵士とされる人物のひとりである。湖南省望城県の出身。児童団や少年先鋒隊に入り活動する。1957年には中国共産主義青年団に入り, 中国各地の農場や工場で作業するなどの奉仕活動を続けた。1960年 (1959年), 人民解放軍に入隊, 直ちに輸送隊に配属された。しかし1962年8月15日, 遼寧省撫順市望花区で電柱を輸送中のトラックを立て直す作業中, 頭を強く打ち死亡した。22歳での殉職だった。死後, 毛沢東などの共産党指導者の言葉を引用した日記が発見され, 雷鋒は軍人の思想的モデルとして大きく取り上げられるようになった。1963年3月5日に毛沢東によって, 「向雷鋒同志学習 (雷鋒同志に学ぼう)」運動が始められた。このスローガンは文化大革命中, 各種新聞や学校教科書で盛んに用いられ, 雷鋒は模範兵士として無私の象徴として偶像に祭り上げられた。(王麗栄「毛沢東の模範教育—「雷鋒同志に学ぼう」から論じる」『毛沢東思想研究』, 2003年第6期, 四川省社会科学院, 28-30頁)。
- [54] 曹守和, 前掲論文, 2-6頁。
- [55] 上海チームのファン「やり返したのでよくやった」『体育報』第1959期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年8月20日。
- [56] 馬鳳鳴「友好を大事にするには両方の努力が必要」, 『体育報』第1961期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年8月25日。
- [57] 丁金「上辺だけの友好は要らない」『体育報』第1967期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月8日。
- [58] 衆兵「友好第一, 競技第二は不条理だった」『体育報』第1961期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年8月25日。
- [59] 王晶錫「良くやった, 正しくやった」『体育報』第1963期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年8月29日。
- [60] 黄理中「タブーを突破しないとサッカーは希望なし」『体育報』第1965期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月3日。
- [61] 呉鴻定ら「「友好第一, 競技第二」は言い過ぎに注意」『体育報』第1965期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月3日。
- [62] 曲新「国内と国際の試合を区別するべき」『体育報』第1967期, 中華人民共和国体育運動委員会: 北京, 1980年9月8日。
- [63] 上海チームのファン, 前掲記事, 「やり返したのでよくやった」。
- [64] ベトナムの挑発に対して, 領土を守るための反撃: 1979年中越戦争を指している。中国は文化大革命後, 経済建設計画が進められていたが依然として毛沢東思想の影響が強く, ソ連との対決姿勢も維持するなかで行き詰まっていた。ベトナム戦争以後, 親ソ政策に踏み込んだベトナム社会主義共和国と関係を悪化させていった。ベトナムは, 隣国のカンボジアのポル=ポト政権が中国寄りの姿勢を強め, さらにベトナム南部国境で領土を主張していることから対立を深めていた。ベトナム軍のカンボジア侵攻が決行され, ベトナム軍は1979年1月には首都プノンベンを制圧し, ベトナムの影響下にあるヘン=サムリン政権を樹立した。1979年2月17日未明, 中国はベトナムのカンボジア侵攻に対する懲罰として一気にベトナム国境を越境して侵攻し, 中越戦争が勃発した。27日からランソンへの攻撃を開始し, 激戦のあと, 3月5日に占領した。その数時間後に, 中国政府は予定の目標を達成したと発表し, 同日ただちに撤退を開始した。この間, 中国軍はベトナムの国境地帯を徹底的に破壊した。こうして攻める方が目標と期間を定めた懲罰のための中越戦争は終了した(坪井善明『ヴェトナム「豊かさ」への夜明け』, 岩波新書, 1994年, 23-24頁)。
- [65] 王晶錫, 前掲記事, 「良くやった, 正しくやった」。
- [66] 馬鳳鳴, 前掲記事, 「友好を大事にするには両方の努力が必要」。

- [67] 李晋寧, 前掲論文, 35頁。
- [68] 「選手からコメンテーターになった張 路」:「文革サッカーの記憶断片 (文革足球記憶碎片)」, 鳳凰資諮, http://sports.ifeng.com/gnzq/200908/0818_4683_1307294.shtml 2009年08月18日掲載, 2017年8月14日アクセス。
- [69] 解黎明「伝統文化に影響された中国サッカー」『体育文化導刊』, 国家体育总局体育文化発展センター, 2004年第12期, 42頁。
- [70] 王平「日中文化比較からみた日本と中国サッカーの発展について」『体育文化導刊』, 国家体育总局体育文化発展センター, 2004年第10期, 62頁。
- [71] Lu Zhouxiang & Fan Hong, *Sport and Nationalism in China*, London and New York: Routledge, 2014, pp.3-25.
- [72] 「大躍進運動」: 1958年から1961年までの間, 中華人民共和国が施行した農業・工業の大増産政策である。中華人民共和国において, 毛沢東の指導する中国共産党が打ち出した「社会主義建設の総路線」のことで, 第2次五ヶ年計画にあたる。それはソ連型の社会主義建設ではなく, 中国独自の方法として工業では西洋技術と「土法」(伝統技術)を併用することと, 農業では集団化を進めた人民公社を建設することを掲げた。工業では鉄鋼業生産が特徴的であったが, 品質は軽視され, もっぱら増産のみが強調された。毛沢東は数年間で経済的にアメリカ合衆国・イギリスを追い越すことを夢見て実施した(今井駿, 久保田文次, 田中正俊, 野沢豊『中国現代史』, 山川出版社, 1984年8月, 282-299頁)。
- [73] Fan Hong, “Not all bad! Communism, society and sport in the great proletarian cultural revolution: A Revisionist Perspective”, pp.48-50.
- [74] Lu Zhouxiang & Fan Hong, op.cit., pp.100-132.

A Study of the Concept of 'Friendship First, Competition Second' argued in 'Newspaper of Physical Education' (1980): The Ideological Continuity and Change of Physical Education Originated in the Period of Cultural Revolution in China

Jinning LI

Key Words

Cultural Revolution Period, Sports History, Chinese political thought, "Friendship first, Competition second"

Abstract

Sports in China experienced a catastrophe during the period of the Cultural Revolution. The development of many sports stagnated, forcing numerous organizations to disband their physical activities, with athletes' training and competitions subsequently banned.

The concept of 'friendship first, competition second' originated during the Cultural Revolution period, contributing to Chinese sports' development. It also aided Chinese diplomatic relations with countries, enhancing their international status and ties with the rest of the world.

However, could the progress of the People's Republic of China in international sports, especially the Olympic Games, effectively maintain the 'friendship first' mentality associated with the Communist Party's mandate? This study focuses on understanding the current situation of the Chinese sports concept of 'friendship first, competition second' during the Cultural Revolution. In this research, content analyzed from sports newspaper in the 1980s reveals public debates and doubts about the 'friendship first' concept. 'Friendship first' was used to propagandize an anti-capitalist idea, a refusal of 'victory first'. This idea formed the core value of Chinese physical education established during the Cultural Revolution, defining the purpose of physical exercises as preparing the proletariat body for the future 'class struggle'. At this point, a 'merit theory' holds that the idea of 'friendship first' has brought about a turning point in the improvement of diplomatic relations, which is assumed to be a political function contributing to the Chinese government. On the contrary, some studies believe that friendship under the 'friendship first' concept is constrained suppression of self-expression, self-disclosure and individualism in sport so that the idea fails to integrate with the realities of sport and stifles its development.

The final section discusses the constancy and changes in how people participate in and watch sports under the 'friendship first' concept. Despite upholding the deep-rooted

influence of the 'friendship first' concept, after the 1980s, people began to question it. Due to the excessive emphasis on 'friendship first', a phenomenon resulting in the audience losing interest in the content of the game often occurs. Some believe that 'friendship first' undermines the formation of competitive sports in which both sides compete legitimately and seriously.

To summarize, the concept of 'friendship first' during the Cultural Revolution dismantled the original Chinese sports values, integrating itself into the socialist concept of physical education and profoundly influencing the subsequent reconstruction process of sports values.

